

## ブラジル移民史と長野県 —レジストロ移民地調査から—

森 武麿<sup>※</sup>

はじめに

神奈川大学日本常民文化研究所では「ブラジル日系移民と在ブラジル人の民俗学的研究」をテーマに、2012年度から数人で共同研究を開始した。私も同研究所所員としてこのプロジェクトに参加することになった。もともと日本近現代史で農民史を研究しており民俗学には疎い。私は「1930年代農村不況から満洲移民へ」の問題に関心を持ち、この10年ぐらい長野県下伊那地方の満洲移民から戦後開拓の歴史を、オーラルヒストリーを基礎にして研究してきたので、この共同研究への参加を呼びかけられることになった。

そこで私がブラジル移民研究のテーマとして、思いついたのは、満洲移民で全国一の送出県であった長野県は、1920年代には県を挙げてブラジル移民を推し進めており、県の移民指導機関であった信濃海外協会の中心となったのは、長野県諏訪出身の永田稠であった。その永田は、昭和恐慌と満洲事変を転機に、以後関東軍顧問として満洲移民に協力していった。こうして長野県は、ブラジル移民から満洲移民の全国的モデル県へと転換することになる。なぜ、長野県はブラジルから満洲に移民先を転換したのだろうか、この疑問を解いてみたいと思ったのが私の問題意識である。それには永田の思想と行動、そしてブラジルでの長野県民の移民実態を知ることが必要である、というのが私の問題設定であった。

ここでは、永田稠を中心とした長野県と  
※神奈川大学大学院歴史民俗学研究科

ブラジル・満洲移民の関係は次の課題として、2013年1月に上記に述べた共同研究のメンバーとブラジル調査を2週間行った成果をまとめてみたい。そこから今後の研究課題を明らかにすることによって、研究方向を見定める序論としたい。そのための調査報告であり、十分な検証をとまなう論文ではなく、旅行記となっていることをお断りしておきたい。

### 1. レジストロ移民史料館

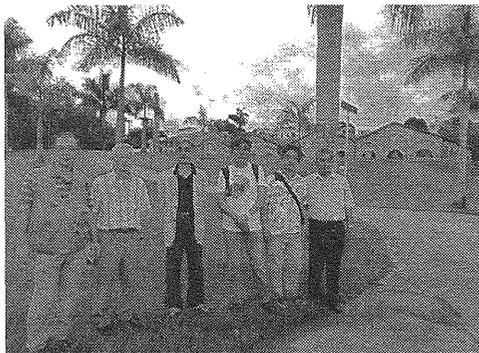
2013年1月4日から、11日間ブラジル調査に、サンパウロ大学の森幸一教授の指導のもとに日本常民文化研究所のメンバー4人（佐野賢治、内田青蔵、泉水英計、森武麿）が入った。成田からパリ経由で23時間、パリでトランジット5時間待ちだったので、28時間、1日以上かかって、ブラジル・サンパウロ空港に到着した。ブラジルは遠い。サンパウロ大学の森幸一教授の案内でブラジル日本人移住史料館を見学する。東洋人街（昔は日本人街）の中にある。移民資料が大量に保管され、新聞資料から写真資料まで揃っていた。まさに移民研究のセンターである。

翌日には、今回の研究対象地であるレジストロへ長距離バスで向かう。4時間半かかる。サンパウロから180キロある。ここからクリチバまで200キロで達する。レジストロはサンパウロとクリチバの中間点である。かつて入植者はサントスから鉄道、道路、徒歩、またはイグアベ川を遡ってレジストロにやってきたという。

早速、日伯レジストロ文化協会を訪ねる。会長の金子国栄氏が出迎えてくれる。金子氏は1959年にブラジルに渡ってきた1世で、新潟出身である。1940年生まれであるから72歳であろうか。副会長はルーベンス・タケシ・シミズ氏で、祖父が北海道から1910年代にブラジルに渡ってきた2世である。ブラジルの第1回入植者が1908年の有名な笠戸丸移民であるから草創期の渡伯である。

レジストロ文化協会は、戦後の1947年に日系人のベースボール協会を母体に設立されたという。このレジストロは草創期のブラジル入植地として有名なところであり、戦前はイグアベ郡（地方）なのでイグアベ植民地（colony）と呼ばれた。金子氏によると、長野県出身者が多いとのことである。

調査はレジストロ移民史料館を訪ねる。とくにイグアベ植民地の1930年代の写真帳は貴重なもので、入植者ごとに写真を撮影しており初期イグアベ植民地の入植者一覧となっている（海外興業株式会社経営『伯刺西爾イグアベ植民地創立廿周年記念写真帖1913 - 1933年』、1963年復刻）。これから長野県出身者を探してみると、下伊那郡では飯田町、下條村、浪合村がみられた。主要な産物は米でありブラジルの最大の穀倉地帯を形成したという。我々の調査したレジストロ史料館は入植地の米穀倉庫を利



レジストロ移住資料館  
（元米穀倉庫）前（2013年1月6日撮影）

用したものである。

レジストロは、米以外の産物ではコーヒー、茶、蘭草などがある。茶は静岡県人が、蘭草は岡山県人が持ち込んだものである。もちろん米は日本人が持ってきたことは言うまでもない。現在でも蘭草はイグアベが主産地であり、蘭草の草履、サンダルなど普及している。私は、お土産に蘭草で出来たレジストロ・サンダルを買った。ブラジル入植者が、日本から持ち込んだ種子がブラジル農業の基礎を形成した、とよく言われるが現地に来てみて初めて実感できた。

## 2. レジストロ開拓地

翌日1月7日には、レジストロ開拓地を見て回る。レジストロの町から車で2時間奥地に入った。昔は車がないので奥地の入植地まで歩いたという。車で2時間かかるのだから歩けば1日かかるだろう。移住した人たちの苦労が分かる。

開拓地の住宅を見る。最初は日本人が建てた教会である。部落20戸のところにプロテスタント教会を1930年代に建築している。やはり移住民にとって生活する上で必要なものは、心を一つにする場所として日本なら神社と寺、西洋なら教会が不可欠である。この教会の特徴は屋根が和風の切妻造となっていることである。日本人が建てたというのだから分かる。同行した神奈川大学の内田青蔵教授によると、日本の曲尺で作っていると言っていた。

次は深澤家の開拓民住居である。1936年建設とのことである。深澤清一氏が建設し、現在息子の伯一郎氏が住んでいる。伯とはブラジルのことであるから、ブラジルで生まれた長男ということである。1945年で日本の敗戦の年であり、私と同年である。祖父は長野県出身であるという。建設当時の写真が残っていたが、白壁に洋風2階建ての瀟洒な建物である。煉瓦造と瓦屋根であ

る。開拓民の質素なものというイメージではない。レジストロ開拓から20年経過しているのもそれなりの蓄財の上に建築されたことが分かる。

そのあとはホクガワ家で、元は山寺家の住宅であったという。この家の面白いのは小川の上に跨いで建てられていることである。自然の涼気をとりにけるとともに、トイレも「水洗式」になる。現在は荒れていて人は住んでいない。

次に行ったのは、日伯レジストロ文化協会副会長ルーベンス・タケシ・シミズ氏の生まれた家で、現在は伯父さんが住んでいるという。1950年代に製茶工場が建設され、その煉瓦工場がそのまま残っている。このあたりでは戦後日本茶を栽培していたという。

そのあと、レジストロの開拓地を車で回る。とくに畑には蘭草を栽培しており、蘭草を天日で干していた。このあたりはコーヒー、茶、蘭草栽培が盛んであったことが分かる。蘭草はもともと日本では、畳表（タタミオモテ）、蓐蔭（ゴザ）の原料として古くから栽培されていた。近江、北陸、東海の一部でも作られたが、とくに江戸時代からは岡山県（備後、備中、備前）が主産地である。ブラジルに蘭草を持ち込んだ人が岡山県人なのか、東海地方の人たちなのか、今後の調べてみたい。私はレジストロのお土産として、ホテルで蘭草の草履（サンダル）を買った。畳は日本でも衰退しているが、ブラジルではそれほど普及せず早くから西洋化したものと思うが、ゴザ、サンダルなど蘭草製品はもてはやされた。

蘭草の畑を見ながら、レジストロをさらに奥地に向かう。奥山家に着く。ここには2世の奥山キヌエ氏（75歳）がおられ、80年前の家が残っており、元気で暮らしていた。キヌエ氏はサンパルロのガララピスから嫁いできたという。なお、キヌエ氏は八丈島

出身である。このあとレジストロ文化協会でも八丈島出身の人とお会いしたが、東京府下の伊豆大島、八丈島など、島からブラジルに渡ってきたというのも興味深い。八丈島からブラジルに渡る経緯はいかなるものであったのだろうか。

近くに奥山兄弟のもう一人の家がある。奥山カツヨシの奥様、スズ氏（88歳）が元気に暮らしていた。2世で、この地で生まれたという。旧姓大日方スズという。長野県出身である。大日方姓は長野県松代など北信地方に多い。

午後には、天谷（あまや）家の製茶工場を訪ねる。茶園は最盛期には140ヘクタール、現在50ヘクタールあるという。年間17回取り入れ、紅茶にするという。

天谷家には見事な屋敷がある。1923年に天谷平三郎が建築したという。彼は北海道出身である。この家の壁には、北海道知事の堂垣内知事の開拓成功をたたえる「拓魂」という揮毫が掛かっていた。家の前には川から引いた広大な人工池がある。この池で雷魚を養殖し子供の栄養に食べさせたという。お茶栽培し製茶にして世界に輸出する。製茶で成功したブラジル移民者の典型である。

天谷家の初代は天谷捨吉で2台が平三郎である。現在は3代目である。捨吉と名前からして末っ子であろう。戦前には次三男問題から末子が移民することはよくあることである。1910年代、北海道開拓民の次三男が、北海道からブラジルに渡ってきたことも興味深い。

レジストロ文化協会の金子会長はここで茶工場の支配人をしたという。金子氏も北海道出身だから、天谷氏とは同郷である。

屋敷の近くに天谷家の従兄の邸宅がブラジル政府の文化遺産として登録されている。

また、天谷家の近くには、製茶経営の先駆者であり、2007年に閉鎖した岡本寅蔵工

場がある。ここはアッサム茶を移植して、ブラジル紅茶を成功させた歴史的な遺産という。茶畑と屋敷をどう保存していくか、今後の課題という。

夜、金子会長の案内で食事をしたが、その時に日伯文化協会聖南西地区会長、リベira沿岸日系団体連合会会長山村敏明氏と歓談した。山村氏は1941年満洲生まれで、1953年戦後最初のブラジル移民で渡って来たという。4歳で満洲から引き揚げて鹿児島に帰り、再び海外開拓を目指してブラジルに来たという。このように、満州帰りから戦後ブラジル移民を選択した人たちもかなりいたと思う。

戦前、排日運動により1908年アメリカ移民の制限から、ブラジル移民が隆盛となり、1924年排日移民法以後、1930年代満洲移民へ転じ、満洲国の崩壊後、戦後再びブラジル移民に向かう人の流れがある。このように国境を越える移民の流れは、その時代の日本のおかれた国際関係、社会関係によって軌道づけられたものである。そのなかでもブラジル移民はその時々の移民の転換を集中的に体现している。アメリカからブラジルへ、ブラジルから満洲へ、戦後再びブラジルへ。このように見ると、山村氏のような満州帰りのブラジル渡航は、日本移民史の本流でもあるとも言える。この点も今後考えてみたい。

### 3. 移民2世からの聞き取り

1月8日はレジストロ開拓地からレジストロ市中心部、日伯レジストロ文化協会に戻り、聞き取りを行った。その前にレジストロの開拓民の墓地を見た。岡本寅蔵、天谷家など初期レジストロ開拓民の墓が立ち並ぶ。土葬だったという。お墓の中で目を引いたのが「運天家の墓」という墓碑銘である。たぶん埋葬の時に移民を振り返り、「運を天に任せる」という意味で改姓したものであ

ろう。海外移民墓地ならではの命名である。

そのあと、レジストロ文化協会会館で4人の人から聞き取りを行った。レジストロ文化協会の金子会長らの手配により、お集まりいただいた4人の方々は以下の通りである。

①吉岡初子氏、1932年8月11日生、80歳、2世、レジストロ生まれ。1世の父は牛越三男で1911年に第2回ブラジル移民で入植、長野県出身、18歳でブラジルへ、1942年から海外興業株式会社に勤務、1954年に亡くなる。

②清丸米子氏、1933年10月23日生、79歳、2世、レジストロ生まれ。父母とも八丈島生まれ。清丸清と結婚。夫清丸は石川県小松市出身で、1915年にペルーに入り、1921年にブラジルに移住。レジストロ入植。

③松村正和氏、1921年12月8日生、89歳、2世、レジストロ生まれ。父は松村栄治、1918年にレジストロ入植。長野県北安曇郡高田村出身。海外興業株式会社勤務。

④小野一生氏、1928年7月6日生、82歳、2世、レジストロ生まれ。父は1924年にブラジルへ、出身は大分県大分郡出身。

すべて2世でレジストロ生まれである。80歳から90歳近い人もおられたが、皆さん元気であった。2世も高齢化しており、時代は3代目、4代目に移っている。1世の入植時代を知る最後の世代がこれらの方々であり、入植の経緯を2世から聞き取りができるのは今しかないだろう。

私は清丸米子氏の聞き取りを行った。あとのメンバーが他の方を担当して聞き取りをした。

米子さんの話では、父は佐々木貞一、母はリラで八丈島出身という。八丈島の5つの村の一つ大賀郷村生まれという。ブラジルに来る経緯は、1915年従兄がペルーに3年間の出稼ぎに行くというので一緒に渡航した。3年の予定が延び、ペルーから、ポリ

ピア、チリを経て、1921年にブラジルに入る。ブラジルも最初からレジストロではなく、パラ州、アマゾン、サンパウロを経て、レジストロに移動した。アマゾンでは沖縄県人の経営するゴム園で働いたという。父はマラリアにかかり大変な苦勞をされた。サンパウロではコーヒー園で働いた。その資金でレジストロの土地を買って入植したようだ。

米子さんは1933年にレジストロで生まれている。兄は1929年生まれで3歳年上、姉が一人いるという。レジストロ入植は1920年代の後半であろう。入植の経緯は生まれる前であるから不確かである。このあたりの気候は八丈島と同じでよかったという。移民する条件として、故郷と気候が似ているということは大きな要因であろう。

小学校時代は現地小学校に通ったという。1939年から1945年の戦時期である。ブラジルではバルガス政権の独裁、国家主義の時代であり、ブラジルが連合国側に立ったため、日系人は困難な立場になる。米子さんによると、日本語はしゃべってはいけないうとして、日系人は相当いじめられたという。日本語教育も禁止されていたので、近所の日本人から日本語を学んだという。親はブラジル騎馬警官が来ると山に逃げたという。日本語で話していると拘留される時代であ



清丸米子さんの聞き取り（2013年1月8日、日伯レジストロ文化協会会館）

る。

戦後は、青年会を中心に日系人ベースボール協会が結成され、1回目はブラジル人が会長になったが、2回目からは日系2世になる。4回目に清丸清がなった。米子さんは、1953年20歳で、清丸清と結婚する。娘1人、息子3人の4人の子宝に恵まれる。

米子さんは子供の時にローゼン神父からカトリックの洗礼を受ける。父貞一は仏教徒でキリスト教の結婚式に反対したという。父貞一は2002年96歳で亡くなったという。「結婚は沖縄の人とはしないこと、八丈島の人としなさい」と言われる。

夫清丸清は、小松市の出身の父がレジストロの土地を日本で買って入植したという。石川県では18軒が入植した。レジストロ5部に入植したのは4軒である。清丸家の生業は1952年から養鶏、そのあと茶園、バナナを栽培した。集落では、米、蘭草、養蚕をやった。コーヒー、茶、バナナが盛んであった。蘭草で莫蔭、草履を作り販売した。草履は海浜で使うので売れた。

長男は近年日本に出稼ぎに行き、電気技師の仕事をした。父が日本に行け、3年働いてこい、という。日本で差別もされたが、いまはブラジルに戻り、会計事務所に勤めている。

現在、レジストロの日本人は、1世が70人（戦後移民者）、2世80人（戦前移民の子弟含む）という。彼らが日本文化の継承者であり、3世、4世に日本文化を伝えている。日伯文化協会、県人会、様々な婦人会（キリスト教婦人会、仏教婦人部、生長の家婦人部、農協婦人部、聖光会婦人部）、老人会などがあり、日本語、お茶、生け花、習字、そして、おにぎり、寿司を教えているという。とくに夏祭り、盆踊りは賑やかで1952年から52回を数える。また、1954年に日本人で新婚旅行に来て、レジストロの小松旅館で宿泊中に病気で亡くなった人を弔うために



## 5. サンパウロ人文科学研究所

1月11日は、サンパウロに戻り、沖縄県人を訪問した。最初は知花真勲で戦後移民である。1928年生まれだから82歳。戦争中は志願兵となり、広島で特攻兵器、回天の搭乗予定であったという。沖縄の三線を弾いてくれた。沖縄文化がブラジルで生きていることを知り感激した。

午後は、サンパウロ人文科学研究所を訪ねた。サンパウロの日系人文化の拠点である。ここで、森幸一先生の紹介で、宮尾進氏とお会いできた。ここで宮尾先生に聞き取りをさせてもらった。

宮尾氏は移民2世で、父はアリアンサ産業組合長をされた方である。アリアンサ開拓は言うまでもなく、永田稠が生涯をかけてブラジル移民開拓の夢をかけた土地である。長野県人が多数入植したところである。サンパウロからかなり内陸部に入ったところである。

宮尾氏は1930年にアリアンサで生まれ、1939年12月サントスから出発、1940年2月11日に横浜に到着した。この時9歳、日本文化を身につけて、ブラジルに戻る予定であったが、戦争となりそのまま終戦まで日本に滞在となった。父の地元は松代、小学校3年から日本の小学校入学、4年で国民学校切り替わり、卒業後旧制屋代中学に進学した。戦争中は勤労働員で中島飛行機篠ノ井工場に動員され、松代大本營の建設にも参加して、強制連行されてきた朝鮮人労働者と話したという。戦後は日本占領下でしばらくはブラジル渡航も不可能であった。戦争直後の16歳で、ポルトガル語を学び始め、ポルトガル語雑誌の編集長となった。ブラジルの子供時代日系人は400人中、3人しかポルトガル語が理解できなかったという。

1948年信州大学文理学部に入り、53年に卒業後、ブラジルに帰る。ちょうど1952年

にサンフランシスコ講和条約で日本が独立し海外渡航が自由となり、戦後ブラジル移民が開始されたためである。ブラジルに戻ってからは、1953年から女学校教師をしたり、コチア産業組合で雑誌の編集をしたり、ブラジル農業関係の雑誌編集長を務めた。1955年からは、サンパウロの日系人の文化サークル「土曜会」に参加、その中心人物となり、その後サンパウロ人文科学研究所長を歴任するなど、ブラジル日系人社会の文化人として中心的役割を担っている。

この人文科学研究所には今の永田稠の息子久氏が週1回は来られるという。娘の永田美知子もアリアンサで頑張っているという。永田一族は今もアリアンサ、サンパウロのブラジル国内で活動しているという。永田稠の日本とブラジルの共存共栄を求めた精神は、今も息子、娘たちによって生きている。

1月12日、サンパウロ市内から1時間ほどのところにあるサンパウロ中央文化協会の収蔵庫を訪ねた。ここには、国士館大学の収蔵庫であったところに日系人が使用した民具、民俗資料が多く収容されている。国士館が日本ブラジル文化協会に寄付したものだという。

最後に、サンパウロ市内のパウリスタ博物館を見学して、今回のブラジル移民・民俗学調査を終えた。

1月12日夜9時半、サンパウロ空港から、パリドゴール空港でトランジット、14日朝9時半に成田に帰国した。

おわりに

以上が、約2週間に及ぶ常民文化研究所を主体とするブラジル調査内容である。ここから今後の研究の課題となることをまとめてみたい。

とくに、聞き書きから分かるように、4人の話し手は、長野県出身が2人、八丈島と

大分県である。レジストロでは長野県出身が多いということが分かった。また、宮田進氏の聞き取りから、永田稔の長野県人の移民の中心であるアリアンサ開拓事業を調査することでブラジル移民と満州移民の関係を解き明かすことが出来るかもしれない、と思う。永田稔氏の一族の方への聞き取りが必要である。

また、モギ市の文化財保存運動のように信濃海外協会の今井五助や永田稔がブラジル移民に深く関係していることが分かる。

以上から、ブラジル移民と満州移民の関係を長野県人移民を対象として考えるために以下三つの課題が設定される。

第1はブラジル移民の地域性の問題である。なぜ長野県が多いのか。その他の県、島嶼からの移民はどのような歴史的社会的条件で移民するようになったのであろうか。

また、八丈島からの移民など、ブラジルと気候が馴染みやすいというのは移民の大きな条件であろう。沖縄が多いのも同じような意味をもつのだろう。

満洲移民のような国策移民と違い、出稼ぎ目的の自由移民の場合、それぞれの移民者の意思で、移動はかなり自由であることが分かる。私の聞いた清丸米子の父はペルーから、ボリビア、チリ、アマゾン、サンパウロ、そしてレジストロと、大移動の結果レジストロに到達し永住している。このような国境を越えて、ブラジル国内も自由に移動しながら、定住化するまでの道のりを検証することの大切さを知った。

第2はブラジル移民と定住の条件を明らかにすることである。これには単に気候で

はなく、生業として、日本の米栽培、茶栽培、蘭草栽培など、生業技術の継承性の問題が関係する。自然を相手とする農業は気候風土との関係を抜きに移民の条件を考えることは出来ない。

第3はブラジル移民者における文化の断絶と継承の問題である。戦時期の経験としての日本文化（日本語）の禁止から、戦後の日本文化を継承しようという2世、3世の行動を再評価する必要がある。清丸米子さんは、戦時下の日本語を外で話すことさえ憚られる生活から、戦後日伯レジストロ文化協会の婦人部を通して、活発な日本文化の継承者として活動している。戦時から戦後にかけての文化の継承はいかなるものであったのだろうか。

これら3点は今回の調査を通して、ブラジル移民史を考えるための私の課題とした。

とりわけ、第1のブラジル移民の地域性では、沖縄と並んで長野の果たした役割が大きい。アリアンサのみならず、レジストロもその一つである。さらに第2、第3の課題とした日本の地域社会の気候風土、生業の展開、文化の継承なども、地域の固有性をもって渡航先の日系移民社会を形成することは明らかである。ブラジル日系移民史を日本文化全体にまとめるのではなく、母国の地域性から細部にわたってとらえかえすことは大切な課題である。今回の調査を通して、サンパウロ州に全体に展開した長野県人の移民が重要な課題であることが明らかになったものと思う。今後の課題とした。